

【論文】

ドイツ語語彙の歴史的発展概説

萩野 蔵 平

Die Entwicklung des deutschen Wortschatzes im Überblick

Kurahei OGINO

要旨

Beim hier vorgelegten Beitrag handelt es sich um einen Überblick über die Entwicklung des deutschen Wortschatzes. Unter stärkerem Bezug auf die Wortschatzstruktur des gegenwärtigen Deutsch behandelt er erstens die Arten des Bedeutungswandels, zweitens den Mechanismus des semantischen Wandels und schließlich den des lexikalischen Wandels. Als Zusammenfassung wird im letzten Kapitel ein Modell über den Wortschatzwandel vorgestellt, das aus Innovation, Evolution und Variation besteht. Diese Abhandlung soll übrigens auch als Teil einer vom Verfasser geplanten Studie „Einführung in die Prinzipien der historischen Linguistik des Deutschen“ dienen.

キーワード：ドイツ語語彙論，ドイツ語史的語彙論，意味変化，語彙変化，借用，外来語，国語浄化主義，見えざる手の理論，語彙の二重構造

1. はじめに

本論文では、ドイツ語語彙の歴史的発展を概観する。具体的には、まず第2章で、意味変化の種類と意味変化のメカニズムについての先行研究をドイツ語史からの具体的な例を用いて解説する。次の第3章では、ドイツ語の語彙変化を取り上げる。特に、現代ドイツ語の語彙構造の特徴の1つとして借用によって生じた語彙の「二重構造」を指摘する。そして最後に、Innovation、Evolution、Variationといった言語変化の要因から構成される語彙変化のモデルを提案する。なお、この小論は、著者によって構想されている「ドイツ語歴史言語学概説」の予備的考察を兼ねるものである。

2. 意味変化

この章では、まず「意味変化の種類」(2.1)について伝統的な分類を取り上げたのち、意味変化に関する構造的な方法論の1つとして「語場理論」について触れる。次に、2.2では意味変化を引き起こす典型的なメカニズムについて論じる。なかでも重要な要因は「隠喩」と「換喩」であるが、語用論的アプローチの1つである「見えざる手」の理論にも言及する。

2.1 意味変化の種類

意味変化は、その経過の特徴により次のタイプに分類できる。

2.1.1 意味拡張 (Bedeutungserweiterung)

意味拡張とは、語義の指示範囲が広がることを指す。語義を、素性意味論 (Merkmalsemantik) にしたがって「意味特徴の束」と定義すれば、意味特徴の数の減少と捉えることもできる。例えば、形容詞 *fertig* は語源的には *Fahrt*+*-ig* に分析でき、「出発・従軍 (*Fahrt*<*fahren*) の準備のできた」を意味したが、それがやがて「準備のできた」「終了した」という一般的な意味にまで拡張した：*Das Essen ist fertig* (食事の準備ができた)。そして現代ドイツ語ではさらに生産性の高い「疑似接辞」(Affixoid) として用いられている：*tassenfertig* (湯を注ぐだけの)、*schlüsselfertig* (即時入居可能な)。また、一般に「もの」「こと」を意味する *Ding* は、ゲルマン社会における「裁判事件」もしくは「裁判所 (民会)」を意味していたものが「事件>事柄>もの」と意味拡張した例である。

意味拡張にはまた「意味の漂泊化」(Bedeutungsverblässung) あるいは「抽象化」(Abstraktion) と呼ばれる現象も含まれる。例えば、*machen* は元来「こねる」を意味したが、そこから「建てる・作る」を経由して現在の「する」という機能動詞的な役割を担うようになった：*Sport machen* (スポーツをする)、*Ärger machen* (もめ事を起こす)。また、「強意の副詞」もこれと同類の現象と考えることができる。典型的な例は *sehr* (とても) で、これは *versehrt* (傷ついた) あるは英語の *sore* (痛い) と同起源であることからわかるように、本来「痛く」を意味していた。これがやがて「非常に・とても」を意味する強意の副詞に一般化した。なお同様の変化は日本語にも見られる：*Er freute sich sehr*、「彼は痛く (=とても) 喜んだ」。また、強意の副詞の出自は「恐怖」を意味する形容詞・副詞が典型的である：*Er ist schrecklich/unheimlich nett* (彼は「恐ろしく>」とても親切だ)、*He was terribly pleased* など。

2.1.2 意味縮小 (Bedeutungsverengung)

意味縮小とは、意味拡張とは反対に、語義の指示範囲が狭くなることをいう。語義を「意味特徴の束」と定義すれば、意味特徴の数が増加し意味が特定化したと捉えることもできる。例えば、*Hochzeit* は中世までは「祝宴」一般を意味したが、今では「結婚式」に意味が限定している。また、動詞 *fallen* は、元来は *fallen* (落ちる・倒れる) の作為動詞 (germ.**fall-eja-*) で「落とす・倒す」を表したが、現在では「(木を) 切り倒す」「(判決を) 下す」のように対象が限定されている。

2.1.3 意味悪化 (Bedeutungsverschlechterung)

意味悪化とは、意味内容の低下を指す。例えば *Knecht* は、中世では一般に「少年」を意味していたが、やがて意味が低下し「下僕」となった。一方、英語では *ae. cniht* (下僕) > *knight* (騎士) となり、ドイツ語とは反対に次項で扱う「意味良化」の現象が見られる。

ところで、意味悪化は意味良化よりも頻繁に見られる言語現象である。その理由は、ポジティブな意味内容を持つ語彙は使用されることが好まれるが、そのことが一方でインフレ現象を引き起こし、本来の価値を減少させるためであると考えられる。その典型的な例が *Frau* である。この語は今では「女性」一般を表すが、中世では「貴婦人」「女王」などの「身分の高い既婚女性」を意味していた。この語は、やがて中世の封建制社会が近世の都市市民社会へ移行すると、市民階級の女性たちに対する敬意表現としても盛んに用いられるようになる。しかし、そのためにかえって価値を減ずる結果となり、価値の高い新たな語が求められた。それが *Frauenzimmer* (婦人<婦人の局) であったり、フラン

ス語から借用されたDameであった。一般に女性を表す表現には、多くの言語において、意味悪化の傾向が見られるという。例えば、ドイツ語Weib (<wîp) なども、もともと「女性」を表していたものが、転じて侮蔑の意を含むようになった例である。

2.1.4 意味良化 (Bedeutungsverbesserung)

意味良化とは、意味悪化とは反対に意味価値の向上をいう。例えばMarschall (元帥) は、元来 ahd.marah (馬)+schalc (下男) からなる「馬丁」の意味であって、それが「主馬頭」を経て「総大将」の意味に格上げされた例である。

2.1.5 意味転用 (Bedeutungsübertragung)

意味転用には、まず、意味借用 (Lehnbedeutung) と呼ばれる他言語からの意味転用がある。それは他言語から形式ではなく、意味のみを自国語の既存の語彙にとり入れることをいう。例えばfeuern は「火を焚く」の意味であったが、英語のfireから「首にする」という意味が新たに付け加えられた。また、意味借用は、既存の語彙を用いるため、借用と異なり、意味の理解が容易になるメリットがある。そのため、古高ドイツ語の時代には、この方法によりキリスト教の概念が数多く借用された。例えば、baptizare (洗礼を授ける) が「沈める、もぐる」を意味したahd.toufen (>taufen) によって取り込まれた例などはその1例である。ちなみに、Betz (³1974) によると古高ドイツ語の語彙は約2万語で、そのうち借用語は3%、借用形成 (Lehnbildung, 図2「借用の形態」参照) は10%であるのに対し、意味借用は20%であったという。

また、「民間語源」(Volksetymologie) も意味転用に分類することが可能である。というのも「民間語源」では、語源が不透明な語彙の構成素の意味が(自国語の)なじみのある語との類推で再解釈されるからである。例えば、カリブ海から伝わったhamacaは、オランダ語hangmakを経由して、ドイツ語では民間語源によりHängematte (ぶらさがりマット、つまりハンモック) となった。また「例」を意味するBeispielという語は、ahd.bispielであって、その意味は「教訓譚、比喩、格言」である。つまり「ついでに (bei=nebenbei) 語られたもの」が元義で、後半の-spielはSpiel (遊び) とは関係なく、英語のgospel (福音<göd良き+spel話) にも含まれている「話」を意味していた。それが民間語源によって形がよく似ているSpielに入れ換えられたのである。

さらに、意味転用の1つのケースとして「共感覚」(Synästesie) がある。「共感覚」とは、ある感覚領域に属する語が別の感覚領域に転用されることをいう。例えば、「甘い声」は味覚>聴覚への転用の例である。転用には例えば次のような方向性が確認されている：1) 触覚>味覚>嗅覚：scharfes Messer (鋭いナイフ) >scharfer Curry (辛いカレー) > scharfer Geruch (刺すような匂い)、2) 触覚>視覚：scharfes Licht (鋭い光)、warme Farbe (温かい色)、3) 聴覚>視覚：ruhige Farbe (おとなしい色)、4) 視覚>聴覚：dunkler Ton (暗い音)。同じような例は数多く見出されるが、逆に例えば*dunkle Speise (暗い料理?) といった比喩、つまり視覚>味覚への転用は成り立たない。その理由は、人間の感覚には生物学的により原始的・基本的な感覚(触覚、味覚など)とより発達した複雑な感覚(視覚、聴覚)とが区別され、その発達の順番が意味転用の方向性にも反映していると考えられる。

ところで、意味転用の典型的なケースは比喩である。比喩には「メタファー (あるいは隠喩)」(Metapher) と「換喩」(Metonymie) とがあるが、これらの概念については2.2「意味変化のメカニズム」であらためて見ていくことにする。

2.1.6 語場理論

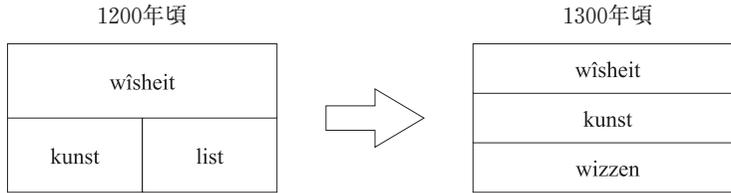


図1 「悟性の意味領域」

これまで見てきた「意味変化の種類」は、個々の意味変化のパターンを「原子論的」に記述したものであった。しかし、意味変化は単独で起こるよりも、当該の語彙要素が語彙構造において占める「価値」の変化の結果として「構造的」に捉えることができる。語彙要素がその中において互いに規定しあいながら意味を紡ぎだす語彙構造のことを「語場」(Wortfeld)という。そして、各単語の意味は、それ自体として決まるのではなく、語場の他の単語との関係により事後的に決まるとする考え方を「語場理論」(Wortfeldtheorie)と呼ぶ。この理論は、F. de Saussureの構造主義の方法論を語彙研究にも応用したもので、その代表的な研究者がJ. Trierである。Trierは、語場理論を史的意味論に導入し、意味変化を「点と点」の比較から「面と面」への比較へとシフトさせた。その代表的な研究がTrier (1931)で、その中で彼は「悟性」に関する語彙を1200年代と1300年代における語場を通して比較研究した。それによると、1200年頃の「悟性」の語場は、kunst (宮廷的・騎士の知識)、list (庶民的・実践的知識)、wisheit (両者を包含する倫理的・宗教的知識) から構成されていた。そしてそれぞれの語彙が1300年頃において変化したのは、語場における個々の語彙の位置づけが変化したためとする。すなわち、listが「悪知恵」の意味に変化することで「悟性の語場」から姿を消し、それを埋める形でwizzen (物質的・技術的知識)が入り込んだ。それは同時にwisheitとkunstの意味範囲にも影響を及ぼし、前者は「宗教的知識」に、後者は「学芸・芸術的知識」に意味が限定されたと説明した。

2.2 意味変化のメカニズム

この節では意味変化を引き起こす代表的な要因として、隠喩・換喩を中心とする認知的・心理的要因を取り上げる。

2.2.1 メタファー・隠喩 (Metapher)

メタファーないし隠喩とは、2つの概念領域間の「類似性」(Ähnlichkeit)に基づく意味転用のことである (Jakobson (1956) 参照)。例えば、1人の少女が「白雪姫」と呼ばれるのは、彼女の「肌の白さ」と「雪の白さ」の間に「類似性」が認められるからで「肌が雪のように白い姫」つまり「白雪姫」と命名された。メタファーは、意味変化の重要な要因の1つとなっている。例えば「理解する」のような抽象的な行為は、自然言語においてそれをじかに命名せず、より具体的な「つかむ」に見立てて表現する。ドイツ語のergreifen, erfassen,あるいは日本語の「把握する」などがその例である。またTischbein (テーブルの脚)、Fuß des Berges (「山の足」つまり「山裾」)、Spargelkopf (「アスパラガスの頭 (つまり) 穂先」)などは「人間の身体部位」の「物」への転用例であり、またZeitraum (期間)、Zeitpunkt (時点)などは「空間概念」の「時間概念」への転用例である。また、zurückはRücken (背中)に由来するが、そこでは転用が「後ろ」>「(時間的に)戻って」>「(成長などが)

遅れて」にまで進んでいる：zwei Meter zurück（2メートル下がって）> zwei Monate zurück（2ヶ月遡って）> Er ist in Mathematik zurück（彼は数学の勉強が遅れている）。なお、文文化理論の知見によると（Szczepaniak (2009, 35) など参照）、その方向性には一定の規則性があり、「人>もの>活動>空間>時間>質」の順に進んでいくと考えられる。この階層性は、同時に自然言語のカテゴリーが「人間中心的」な観点から構造化されていること、また意味変化が「具体的なもの」>「抽象的なもの」へと進むことを示している。

2.2.2 換喩 (Metonymie)

換喩は、2つの概念領域間の「近接性」(Kontiguität) に基づく意味転用のことである (Jakobson (1956) 参照)。例えば、1人の少女が「赤頭巾ちゃん」と呼ばれるのは、その「少女」と彼女の衣服の「赤頭巾」の間に「近接性」が認められるからで、衣服によってその人物を表現し「赤頭巾ちゃん」と名付けられたわけである。

換喩は「近接性」の種類によりさらに次のように下位区分される：

1) 部分>全体：「赤頭巾ちゃん」やDickschädel (石頭、頑固者) など。2) 全体>部分：Dirndlが「少女」から (少女が身に付けていた) 「ディルンドル (バイエルンなどの民族衣装)」に変化したケース。3) 作者>作品：Goethe lesen (ゲーテ[の作品]を読む)。4) 材料>製品：Brille (メガネ) は、素材のberille (緑柱石) が製品そのものを意味するようになった例である。5) 地名・人名>製品・もの：Gouda[käse] (ゴータチーズ) はオランダの都市名Goudaに、Guillotine (断頭台・ギロチン) は提唱者ギヨタン (J.I.Guillotin) の名前に由来する。6) 容器>中身：einen Teller aufessenは「1皿平らげる」意味。またラテン語のdiscus (円盤、皿) に由来する英語のdishは文字通り「(皿に盛った) 料理」の意味に移行した。7) 行為>結果：Rechnung (計算>勘定書き)、Presse (プレス>新聞) など。

最後に、メタファーと換喩が結合した例を挙げておこう。例えば、Klaueは1)「動物の爪」、2)「人間の手」、3)「悪筆」という意味を持つが、この多義性は、1)>2)は「メタファー」が、2)>3)は「換喩」が作用した結果である。

2.2.3 含意 (Implikatur)

含意とは、聞き手の側からなされる解釈・推論プロセスのことで、時間>理由などの転移を説明することができる。例えば、Seit Otto hier ist, ist die Stimmung schlechtという文は1)「オットーがここに来てから、雰囲気が悪くなった」と並んで、2)「オットーがここに来たので、雰囲気が悪くなった」とも解釈可能であるが、それは「時間的前後関係」は「因果関係」を含意すると考えられるからである。これはラテン語でpost hoc ergo propter hoc (この後で、したがって、これ故に) と呼ばれる (厳密には誤った) 因果律に基づいている。さらにまた、Weile (時間) と同語源の「理由」の接続詞weilは、古高ドイツ語のdia wila (=die Weile) が縮小したもので、16世紀までは「…の間」「…以来」「…の限り」といった多様な時間性を表していた。つまりこの接続詞は、時間>時間・理由>理由と変化してきたと考えられる。そのため、Man muss das Eisen schmieden, solange es heiß ist (鉄は熱いうちに打て) という諺が、かつてはMan muss das Eisen schmieden, weil es heiß istとも表現できたわけである。ちなみに、weilと同語源の英語のwhileは時間の意味に留まり、一方sinceは、時間から理由に移行しているというように、両言語間で含意の進行の度合いに差異が見られる。

なお含意関係にある命題は、また「近接性」の関係とも解釈できるので、含意を「換喩」のなかに

組み込むことも可能である。その際「意味悪化」を伴うことが多い。例えば、komischの「面白い」>「変な」の変化や、billigの「正当な」>「安い」>「安直な」(billige Ausrede「見え透いた言い逃れ」)の変化などがそれに当たる。

2.2.4 婉曲語法 (Euphemismus)

婉曲語法とは、タブーや口に出すことが憚れることを別の表現で遠まわしに表現することをいう。婉曲語法の典型的な対象となるのは、死や病気などに関する語彙である。例えば、中世では「病気の」ことを直截にsiech (英sick) とは言わずに、kranc (弱った) と換喩的・婉曲的に表現した。やがてkranc (>krank) は「病気の」状態そのものを指すようになり、本来の語siechにとって代わった。なおsiechは今日Seuche (疫病)、Sucht (嗜癖) などにその名残をとどめている。

2.2.5 誇張法 (Hyperbel)

人間には、言語表現が度重なる使用により「使い古された」と感じられると、強いインパクトを有する表現を求める傾向がある。そのようにして多くの誇張された表現が生まれた：*supermodern* (超近代的な)、*todmüde* (死ぬほど疲れた)、*Bombenerfolg* (大成功)、*vor Langweile sterben* (死ぬほど退屈である)。このような大げさな言語使用は、ナチズムなどの政治的プロパガンダなどにも典型的に見られる：*einmalig* (先例のない)、*unvergleichlich* (類を見ない)、*die unzerstörbare Lebenskraft der deutschen Nation* (ドイツ国民の不滅の生命力) など。

ところで、このような誇張法は、また否定表現において頻繁に見られ、実際ドイツ語史全般において否定の強調表現が繰り返し登場する：*ahd. ni drof* (=Tropfen) ; *mhd. niht ein brôt* (=Brot)/ *ein ei* (=Ei)/ *ein har* (=Haar) / *eine bône* (=Bohne) ; *nhd. nicht im Geringsten, nicht die Bohne, einen Dreck* : *Das interessiert mich nicht die Bohne* (そんなことに私はまったく興味がない)、*Das geht dich einen Dreck an* (それはお前にはまったく関わりのないことだ)。これらの例においてnichtといっしょに、あるいは単独で用いられている名詞はすべて「微小些細なもの・価値のないもの」(水滴、パン、卵、毛、マメ、泥・汚物) を表す語彙であるという共通性があり、これで「まったく…ない」という強い否定を生み出している。

2.2.6 反語 (Ironie)

皮肉、非難、からかいなどの気持を表すために、本来の意図とは正反対の意味内容をもつ表現を用いる技法。例えば*ein sauber Patron* の文字通りの意味は「清廉潔白な庇護者」だが、反語的な意味が慣習化して「ひどい奴」の意味に変化した。皮肉な意味での*ein schöner Freund* (すてきな友) なども同様の例である：*Du bist ja ein schöner Freund* (お前はほんとうにいいやつだよ)。

2.2.7 省略 (Ellipse)

省略が起こると、省略前の語群全体の意味が省略によって生まれた短縮形に移行する。例えば、自動詞*trinken*は、*Alkohol trinken*の省略形で「酒を飲む」の意味である。また、「自慢する」の意味の*aufschneiden*は、*mit dem großen Messer aufschneiden*「(客の前で) 大きなナイフで(肉を) 切り分ける」に基づくが、それがまず「自慢する」ことのメタファーとなり、その意味が*mit dem großen Messer*の省略により*aufschneiden*自体に移ったと説明できる。また省略は、しばしば慣用句においても現れる：*Ich muss mal [zur Toilette gehen]* (トイレに行く)、*Du kannst mich mal [am Arsch lecken]* (くそくらえ)。

2.2.8 見えざる手の理論 (Theorie unsichtbarer Hand)

「見えざる手」(unsichtbare Hand)とは、言語使用者の意図とは異なる言語変化を説明するために導入された概念であるが、この用語自体は、経済学者アダム・スミスの「自己の利益の追求は、神の見えざる手の働きにより、社会全体の利益になる」という市場原理に関する学説に由来する。Keller (1994)によると、言語変化とは自然現象(因果律)、人間の意図的な行為の結果(合目的性)のいずれでもなく、第3のタイプの現象であるという。それはちょうどTrampelpfad(自然にできた小道)に似ているという。というのもそのようにしてできた道は、人間の行為の結果ではあるが、意図的行為の結果ではない。近道をしようとする意図が期せずして生み出したものだからである。

ところで、この仮説は、2.1.3「意味悪化」の項でも取り上げたFrauの意味変化(貴婦人>女性)をうまく説明してくれる。つまり、Frauにおける意味の悪化は、言語使用者の意図ではもちろんなかった。彼の意図は、逆に、かつて高貴な婦人を表していたFrauを市民階級の女性にも用いることで彼女らのイメージやステータスを押し上げることにあった。しかし、その表現が多用されるとありがたみが薄れ、意味の悪化という予期せぬ言語変化を引き起こしたと説明できる。

また、現代ドイツ語の「類義語」の存在にも「見えざる手」が関与している。そこには例えばMoment-Augenblick(瞬間)、Adresse-Anschrift(住所)、Projekt-Entwurf(計画)といった借用語と固有語からなる語彙のペアが存在するが、このような語彙の二重構造がどのように生じたかといえば、その原因の1つとして、外来語からの影響の排除を目的とした「国語浄化主義」(Sprachpurismus)を挙げることができる。国語浄化主義とはそもそも外来語をドイツ語化することで外来語を駆逐する運動であり、上にあげた各ペアの後半の語彙もそのようなドイツ語化の試みであった。しかし、上の例からも明らかのように、そのような意図的な試みが当初の目的を達成することは稀で、外来語を残したまま自国語による翻訳語を生み出している。つまり、「語彙の二重性」とは「見えざる手」による仕業と考えることができる。なお、「語彙の二重性」については3.4「ドイツ語語彙の二重構造」において詳しく扱う。

3. 語彙変化 (lexikalischer Wandel)

この章では語彙の拡張について論ずる。語彙は、様々な方法によって増大していくが、ここでは代表的な手段としてまず「借用」(Entlehnung)を取り上げ、そこからドイツ語の語彙の史的発展を見ていく。続いて、新しい語彙の誕生のもう1つの手段として「語彙化」(Lexikalisierung)について説明する。

3.1 語彙の諸相

ドイツ語の語彙は、歴史的にみると次の3通りに分類できる。1) 相続語(Erbwort)。相続語とは、借用(Entlehnung)によらず祖語にまで遡ることのできる当該言語固有の語彙のことをいう。例えば、hundert(100)、Vater(父)、Zahn(歯)、Sonne(太陽)、essen(食べる)などはインド・ヨーロッパ語起源の相続語である。また、他のインド・ヨーロッパ語族には対応が見られないゲルマン語からの相続語にはSee(海)、Brot(パン)、König(王)、Waffe(武器)などがある。2) 外来語(Fremdwort)。外来語とは、外国語から入ってきた語彙のうち外来の意識がまだ強く残っている語彙

を指す。発音や綴りなどに外国語の痕跡を残していることをその主な特徴とする：Comeback（カムバック）、jobben（バイトする）、Manager（支配人）など。3）借用語（Lehnwort）。借用語とは、外来語としての意識が時代とともに薄れ、同化が進んだ語彙のことをいう。例えば、Fenster（窓）や Straße（道路）などは、ゲルマン人がローマ人と接触を開始した紀元前後の時代にラテン語から借用され語彙であるが、今ではドイツ語にすっかり溶け込んでいる。

3.2 借用のタイプ

借用とは他言語にはあるが、自国語にはないことば（概念）をとり入れることであるが、それには大きくわけて2通りの方法がある。そのひとつは、前節で見たように、他言語の語彙をそのままとり込む借用語（Lehnwort）という方法であり、もうひとつは、一度自国語の言語素材に翻訳して受容する内的借用（Lehnprägung）という方法である。内的借用は、さらにその翻訳の仕方が起点言語の形式とどの程度対応しているかに応じて1）直訳借用（Lehnübersetzung）、2）意識借用（Lehnübertragung）、3）借用新造（Lehnschöpfung）に下位分類される。

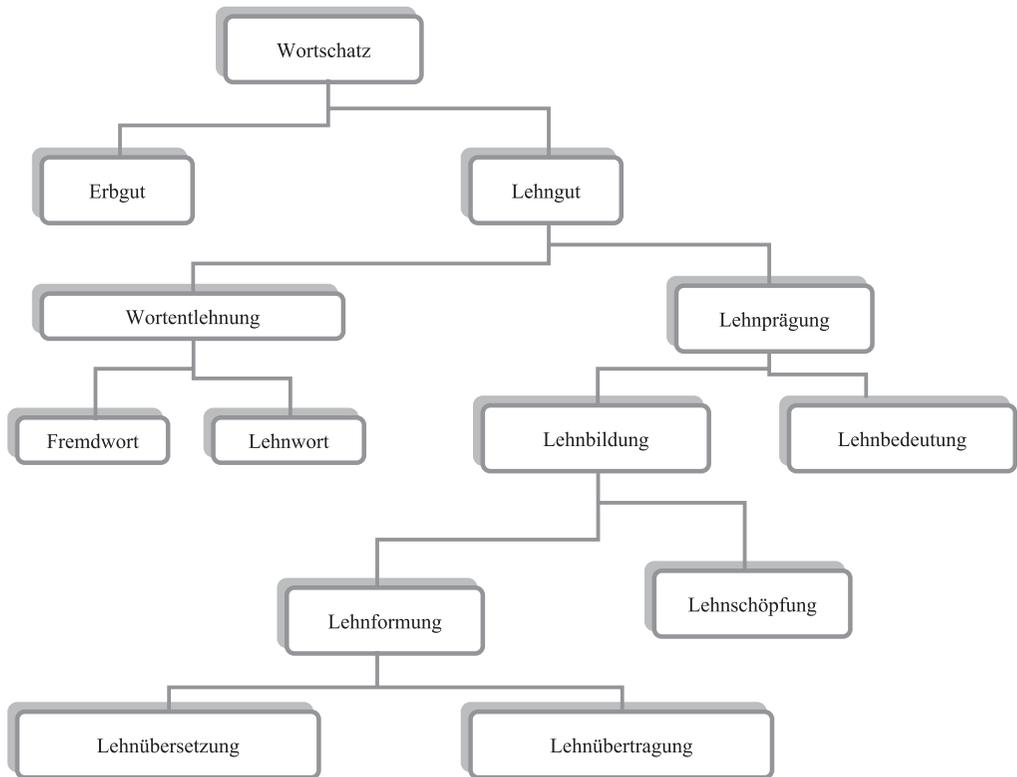


図2 借用の形態：Betz（³1974）に依拠

3.2.1 直訳借用（Lehnübersetzung）

直訳借用とは、他言語の語彙をまず構成要素に分解し、各要素をそれに相当する自国語の語彙に翻訳してとりこむタイプを指す。例えば engl. television / frz. télévision（テレビ）は、tele（遠く）+ visio

(見る)と分解されるが、それを各要素に対応するドイツ語で翻訳したものがFernsehenである。その他ラテン語dies lunae>Montag (月曜日)、英語Iron Curtain>Eiserner Vorhang (鉄のカーテン)なども直訳借用の例である。

3.2.2 意識借用 (Lehnübertragung)

意識借用とは、直訳借用と異なり、起点語彙と翻訳語彙の間に部分的な対応関係しか認められない借用のケースを指す。例えば「電話」をTelefonとして導入すれば借用語であるが、ドイツ語にはそれと並んでFernsprecherという表現もある。Telefonはtele (遠く)+fon (声)に分解でき、この例の場合tele=fernの対応は認められるが、後半部分は(意味的に対応しない)-sprecher (話す装置)で置き換えているので意識借用となる。ちなみに、ラテン語のobjectum (対象)は借用語、直訳借用、意識借用の3通りで導入されている面白い例である。まず借用語はObjektとなる。objectumは、ob- (反対に)+-jectum (投げられたもの)となるが、Objektと同義のGegenstandはgegen- (反対に)+-stand (立っているもの)に分解されるので意識借用にあたる。ところで、Gegenstandと並んで18世紀の半ばまでGegenwurf (反対に投げられたもの)という形式も使われており、これは直訳借用の例となる。

3.2.3 借用新造 (Lehnschöpfung)

外国語の語彙とその翻訳語との対応関係の度合いは、直訳借用、意識借用の順に低下するが、外国語の語彙を模範にしながらも、その形式にこだわることなく自由に新語を作り出すことを借用新造という。例えばドイツ語のAuto[mobil] (自動車)はfrz. automobileに対応するが、ドイツ語にはさらに「動力車」を意味するKraftwagenという表現もあり、これはautomobileに触発されてできた新語である。ちなみに、Automobilの直訳借用Selbstfahrer、つまり「自動車」も提案されたことがあったが、これは浸透しなかった。またフランス語cognacに対するBrandwein (ブランデー)、借用語Dialektに対するMundart (方言)なども借用新造の例といえる。

3.3 借用の歴史

言語的借用は、一般の言語変化と同様、常に一定の頻度と強度で起こるのではなく、そこには強弱や緩急の点で差があり、ドイツ語でもいくつかの時代において借用が盛んに行われた。そこで、以下において、Stedje (1989)などを参考にしながら、それら借用のピークを時代順に概観しておこう。ドイツ語史では、計7回の借用のピークが認められる。すなわちドイツ語は、まずヨーロッパにおけるキリスト教と学術の共通語としてのラテン語とに持続的で緊密な関係が認められ、それはとりわけ3.3.1、3.3.2、3.3.4の3つの時代において顕著に表れている。また、ラテン語と並ぶ文化語・文明語としてのフランス語からも大きな影響を受けており、特に3.3.3と3.3.5で著しい。さらに、3.3.7、とりわけ第二次世界大戦以降は米語がその影響力を増しているといえる。

3.3.1 ゲルマン語時代

まず、最初のそれはドイツ人(というよりもゲルマン人)がローマ人との接触を開始した紀元前50年から紀元500年に至る時代にあたり、ゲルマン社会とは比べものにならないほど高度に発達したローマ文明から多くのラテン語彙がとり入れられた。代表的な例としてはZiegel (<tegula, 煉瓦)、Mauer (<murus, 壁)、Fenster (<fenestra, 窓)、Straße (<strata, 道路)、Zoll (<tolonium, 税関)、Spiegel (<speculum, 鏡)、Markt (<mercatus, 市場)、Kelch (<calix, 杯)、Wein (<vinum, ワイン)、Rose (<rosa, バラ)などがあるが、とりわけ多くの建築用語が借用されたことが特徴的である。

3.3.2 古高ドイツ語時代

その後続く時代は、古高ドイツ語 (Althochdeutsch) と呼ばれる時代にまたがる時期で、この時代になるとフランク王国のカール大帝がキリスト教化政策を強力に推し進めた結果、前の時代に引き続き多くのラテン語の語彙がドイツ語に流れ込んできた。それは年代的には6世紀から9世紀にかけての時代に相当し、Papst (<papa, 法王)、Kloster (<claustrum, 修道院)、Mönch (<monachus, 僧侶)、Altar (<altare, 祭壇)、Portal (<portale, 正面入り口)、Schüler (<scholare, 生徒)、predigen (<praedicare, 説教する)、schreiben (<scribere, 書く)、Pergament (<pergamentum, 羊皮紙)、Tafel (<tabula, 黒板)、Brief (<brevis, 手紙)などがその例である。このようにこの時代の借用語には、キリスト教や学術関連の語彙が多いことがわかる。

3.3.3 中高ドイツ語時代

やがて中世も最盛期を迎え、言語文化の担い手が教会・聖職者から宮廷・騎士階級に移行すると、借用もまた新たなピークを迎えることになる。この中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch) と呼ばれる時代の文化的先進国はフランスやフランドル地方であって、多くのフランス語が宮廷・騎士文化の移入と歩調を合わせてドイツ語に流入した。その大多数は、Abenteuer (<aventure, 冒険)、Lanze (<lance, 槍)、Turnier (<tournei, 馬上槍試合)、Harnisch (<harnais, 甲冑)、Tanz (<danse, ダンス)、Samt (<samit, ビロード)などの宮廷騎士文化に関するフランス語である。またその他にも、外来の動詞をドイツ語へ取り込む際に用いられる極めて生産的な接尾辞-ieren (<-ier: studieren 大学で学ぶ, reparieren 修理する)や、同じく接尾辞の-lei (<ley: mancherleiいろいろの)などもこの時代にフランス語の影響のもとに生み出された形式である。

3.3.4 初期新高ドイツ語時代

15世紀の終わり頃から16世紀にかけての人文主義時代では「古典に戻れ」の合言葉の下、多くのギリシャ語やラテン語や流入し、ドイツ語を豊かにした。例えば以下のようなラテン語経由の学術語はこの時代に借用されたものであった: Grammatik (<grammatica, 文法)、Geometrie (<geometria, 幾何学)、Mathematik (<mathematicus, 数学)、Examen (<examen, 試験)、Testament (<testamentum, 遺言状)、Universität (<universitas, 大学)、Student (<studens, 学生)、Professor (<professor, 大学教授)、Fraktur (<fractura, ドイツ文字)、Prozess (<processus, 過程)など。

3.3.5 新高ドイツ語時代(1)

ドイツの歴史に決定的な影響を及ぼした30年戦争 (1618-1648) およびその後の「アラモード時代」においては、今度はまたフランス語やイタリア語などのロマンス系の語彙が文字通り氾濫した。この時代に由来する語彙には、Alarm (<alarme, 警報)、Kanone (<canon, 大砲)、Soldat (<soldat, 兵士)、Infanterie (<infanterie, 歩兵)、Bombe (<bombe, 爆弾)などの戦争用語のほか、Mode (<mode, 流行)、Kostüm (<costume, 服装)、Perücke (<perruque, かつら)、Balkon (<ital. balcone, バルコニー)、Sofa (<sofa, ソファー)などの貴族文化に関するものが顕著である。なお、アラモード時代には、外国語の氾濫から自国語を守ろうとする「国語浄化運動」が活発になり、多くの「国語協会」(Sprachgesellschaften)がドイツ各地に創設されたが、その活動の影響については3.5「国語浄化主義」で扱うこととする。

3.3.6 新高ドイツ語時代(2)

やがて19世紀を迎えると産業革命や科学技術の発展に伴い、古典語をもとにしてKommunismus (共

産主義)、Imperialismus (帝国主義)、Demonstration (デモ行進)、Streit (ストライキ)、Photographie (写真)、Telegramm (電報)、Automobil (自動車)、Omnibus (バス)、Journalist (ジャーナリスト)、international (国際的な) のような国際共通語彙 (Internationalismen) が生み出された。

3.3.7 現代ドイツ語時代

最後に第二次世界大戦以降は、英語 (米語) がいわば世界共通語の地位を獲得したため、ドイツ語のみならず世界の多くの言語が英語から数多くの語彙を借用するにいたっている。例えばDrink、Job、Make-up、Handout、Manager、Model、Party、Trend、Boomなどがその例である。最近ではまた、英語の単語にドイツ語風の動詞語尾をつけた独英語 (Denglisch) と呼ばれる形式も多く見られる: anlicken (<click、クリックする)、recyclen/recyclen (<recycle、リサイクルする)。さらに元来英語にはない「独製英語」も独英語の現象の1つとされる。例えばTalkmaster (トーク番組の司会者) や Dressman (男性モデル) などがそれに該当する (英語ではそれぞれtalk show host、male modelという)。

3.4 ドイツ語語彙の二重構造

3.2 「借用のタイプ」において借用には借用語と内的借用の2つの方法があることを見てきたが、この節では英語と比較することでドイツ語の借用の特徴とそれに起因する現代ドイツ語語彙体系の特徴を論じていく。そのためにまずいくつかの語彙をサンプル的に取り上げ、両言語における借用形式の違いを確認しておこう。

| 古典語 | 英語 | ドイツ語 | 日本語 |
|--------------------------------------|-------------------------------------|--|--------------|
| (ギリ) hydro kephalē | hydrocephalus | Hydrozephalus ----- Wasserkopf | 水頭症 |
| (intestinum) duodenum (digitorum) | duodenum | Duodenum ----- Zwölffingerdarm | 12指腸 |
| diaphragma | diaphragm | Diaphragma ----- Zwerchfell | 横隔膜 |
| (ギリ) prostatēs | prostata | Prostata ----- Vorsteherdrüse | 前立腺 |
| albumen (<albus白い+ovum卵) | albumen/albumin ----- protein | Albumen ----- Eiweiß ----- Protein | 蛋白質 プロテイン |

注：(ギリ) はギリシャ語。それ以外はラテン語。

図3 ドイツ語語彙の二重構造 (1)

図3の最初の例は「水頭症」を表す語彙である。英語ではhydrocephalusといい、これはギリシャ語起源の借用語である。この語はhydro「水」+ cephalus (<gr.kephalē)「頭」と分解できる。一方ドイツ語では、HydrozephalusおよびWasserkopf (<Wasser水+Kopf頭) という。前者は、英語同様、借用語であるが、後者は内的借用のうちの直訳借用の例である。同様の例は「12指腸」にも見られる。英語のduodenumはラテン語のintestinum (腸) duodenum (12) digitorum (指) の短縮形で「12」を意味す借用語である。それに対してドイツ語は同じ借用語のDuodenumと並んで直訳借用形Zwölffingerdarm

(<zwölf 12+Finger指+Darm腸) を用意している。このような関係は、その他の多くの語彙において容易に見つけることができる (図3参照)。すなわち、英語は外来の語彙をもっぱら借用語としてそのままとり込む傾向があるのに対し (もっとも freedom—liberty、strength—power、main—chief のような例もないわけではないが)、ドイツ語は借用語と内的借用を併用しているわけである。そして借用語方式を採用している英語では、そのため古典語出自の医学用語や学問用語などの「高級語彙」と「日常語彙」の間に断絶が生まれているが、借用語と内的借用の2つの方式をとっているドイツ語では、内的借用によって高級語彙をドイツ語固有の日常語彙に置き換えてきたので両者の間には一定の連続性が保たれている。つまり、ドイツ語では Hydrozephalus のような外来系の語彙と Wasserkopf のような固有語という一日本語の「漢語」と「大和ことば」を連想するような一語彙の二重構造が生み出されている。

ところで上で見てきたような〈自国語系〉対〈外国語系〉という二重構造は、また派生形式においても観察される。例えば、ドイツ語では形容詞派生の名詞は、-heit/ (-ig)keit をつけて造語する方法が一般的である：schön (美しい) → Schönheit (美)、krank (病気の) → Krankheit (病気)。しかし、この派生方法は、形容詞が外来語である場合には一般的には適用されず、別の派生語尾 -ität を用いる：stabil → Stabilität (*Stabilheit)、normal → Normalität (*Normalheit) (ただし、Absolutheit や Exaktheit のような混合形式も少数だが存在する)。その結果、次のような2つの派生形式が存在することになる：

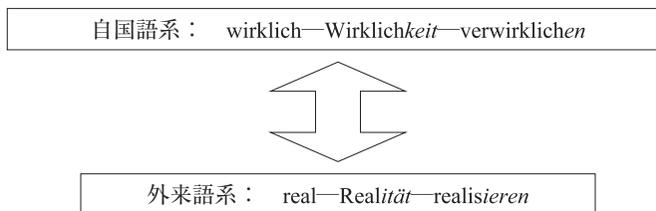


図4 ドイツ語語彙の二重構造 (2)

3.5 国語浄化主義

それではドイツ語に見られる語彙の二重構造はどのようにして生じたのであろうか。それに対する1つの重要な契機として「国語浄化主義」(Sprachpurismus) が指摘できよう。「意味変化のメカニズム」の2.2.8「見えざる手の理論」でも少し触れたが、国語浄化主義とは、外来語の濫用を戒め、自国語による翻訳語の使用を奨励する運動である。しかし、外来語をドイツ語化する試みが本来の目的を果たしていることは稀で、むしろ外来語を残したまま自国語による翻訳語を生み出すことが多い。つまり、国語浄化の失敗は、多くの類義語による語彙選択の幅を増やし、ドイツ語の語彙を豊かすることにつながった。ところで、ドイツ語史において見られる大規模な国語浄化運動は次の3つの時代に顕著である。

3.5.1 17世紀：アラモード時代

まず最初は、17世紀の30年戦争とそれに引き続く「アラモード時代」で、フランス語の氾濫に国語の危機を感じた愛国主義的な貴族、文人、文法学者などの学識者がドイツ各地で「国語協会」(Sprachgesellschaften) を設立した。そのモデルとなったのがイタリアの「クルスカ協会」(Academia della Crusca, 1582年設立) で、それに倣って「実りを結ぶ会」(Fruchtbringende Gesellschaft, ワイマール、1617年) を初めとして、「誠実な樅の木会」(Aufrichtige Tannengesellschaft, シュトラースブルク、

1633年)、「ドイツ主義会」(Deutschgesinnte Genossenschaft、ハンブルク、1643年)、「ペーグニッツ川の牧羊者と花の会」(Hirten- und Blumenorden an der Pegnitz、ニュルンベルク、1644年)、「エルベ白鳥の会」(Elbschwabenorden、ハンブルク、1656年)など多くの国語協会が創設された。例えば、「実りを結ぶ会」の主要メンバーの1人であるツェーゼン(Phillip von Zesen)が行ったドイツ語化の提案には次のようなものがある: Adresse(住所)→Anschrift、Projekt(計画)→Entwurf、Dialekt(方言)→Mundart、Autor(著者)→Verfasser、Devise(スローガン)→Wahlspruch。これらの語彙は現在においても(文体的な位相の相違を伴いながら)類義語として用いられている。

3.5.2 19世紀初期:解放戦争時代

第2の時期は、19世紀初めのナポレオンに対する解放戦争の時代で、祖国愛に駆り立てられてドイツ語からフランス語を駆逐する運動が展開された。例えば、Karikatur(風刺画)→Zerrbild、Resultat(結果)→Ergebnis、progressiv(進歩的な)→fortschrittlich、realisieren(実現する)→verwirklichenなどはカンペ(J. Heinrich Campe)による提案である。なお、Besch/Wolf(2009, 103)によると、彼の手になる3,000近いドイツ語訳例のうち浸透したのは約10%だとされる。ところで、この時代には、極端な愛国主義、純血主義、排他主義が生まれつつあったが、Campeの意図はむしろ語彙を透明にすることで一般民衆を広く政治議論に参加させようとする国民啓蒙にあった。

3.5.3 19世紀後半:ドイツ帝政成立期

最後の例は、1871年のドイツ帝国成立以後の時代にあたる。この時代においてドゥーデン(K. Duden)による正書法改革や、ズィープス(Th. Siebs)による標準発音の確定など、近代国家にふさわしい標準語の整備が進んだが、その一環として鉄道・郵便などの国家的事業の分野でのドイツ語化が試みられた。その際、重要な役割を演じたのが1885年に設立された「全ドイツ国語協会」(Allgemeiner Deutscher Sprachverein)で、Perron(プラットフォーム)→Bahnsteig、Billet(切符)→Fahrkarte、Kuvert(封筒)→Briefumschlagなどはこの時代に造られた語彙である。

3.6 語彙化(Lexikalisierung)

語彙を拡張する手段としては、借用のほかにここでは語彙化を指摘したい。語彙化とは、本来は複合的な語彙(合成語あるいは派生語など)であったものが、構成要素間の意味的結びつきが不明瞭になり、単一語化(Univerbierung)することである。例えばNachbar(隣人)は、今日では構成要素が融合していて語彙分解できないが、本来はahd. nâh-gibûr(近くに+住む人)が語彙化したものである。語彙化はさらに、heute(今日<ahd. hiu taguこの日に)、Vergissmeinnicht(忘れな草<Vergiss mein(er) nicht!)のように句や文の(一部分)の単一語化にも見られる。

語彙化は、意味的には1)イディオム化(Idiomatisierung)と2)無縁化(Demotivierung)を引き起こす。例えば、Junggeselle(独身男性)は、形式的にはjung(若い)とGeselle(職人)に分解できるが、個々の構成要素の意味の総和がこの語彙全体の意味とはならないことが示すように、イディオム化と無縁化が認められる。さらに語彙化は、形式的な透明性の低下を引き起こすことがある。例えば、Jungfer(乙女)は、jung-ferと分析できるが、後半の要素-ferは今日では自立した形態素としては存在しない。これは本来mhd. juncvrouwe(姫君)が縮小した形である。また、これと同じことがBräutigam(花婿)の-gamについても言える。-gamはahd.gomo(男)に由来するので、Bräutigamとは「花嫁(Braut)と一緒になる男性」の意味であった。このような特定の語彙のなかでしか用いられない要素

はunikales Morphem（唯一形態素）と呼ばれる。語彙化においてこのように造語の形式があいまいになる現象は、Adler（ワシ）やWeltではさらに進行し、今日ではそれらが複合語であったことを示すなごりはすっかり消えてしまっている。つまりAdler（ワシ）はmhd.adel（高貴な）+ ar（ワシ）が、Welt（世界）はahd. wer（人）+ alt（時代）（「神々の時代」「巨人の時代」に対する「人間の時代」）が語彙化したものである。

4. まとめ

2.2「意味変化のメカニズム」において、意味変化を引き起こす8種類の要因について論じたが、最後に、これらの要因を生み出す人間のコミュニケーション上の動機について考察してみたい。この点において参考となるのは、von Polenz（²2000）が行っている言語変化要因についての考察である。すなわち彼はその著作において、言語変化のイデオロギー、代表的な言語変化論について論じた後に、言語変化の要因について次のような4分類を提案している：1）Ökonomie、2）Innovation、3）Variation、4）Evolution。以下簡単に説明すると、1）Ökonomieは言語の「経済性」のこと、また2）Innovationは、借用・造語などによる新しい語彙の創造において典型的に見られる「革新」のことである。一方3）Variationは、言語表現の多様性、言語変種内の競合関係についての視点であり、最後の4）Evolution「進化」には、2.2.8で触れた「見えざる手の変化」つまり、予期せぬ変化現象が含まれる。

ところで、これら4種類の要因をvon Polenzは同一レベルに位置付けて言語変化の仕組みを説明しているように見えるが、本稿におけるこれまでの記述を踏まえて検討するならば、これら4種類の要因は、言語変化の過程において異なる役割を果たすものと考えるのが妥当であろう。そこで以下において、彼の説明に変更を加えた上で、語彙変化についての新たなモデルを提示してみたい。

まず、言語変化の主たる契機としてInnovationを想定することが可能である。なぜならば、この要因は、ある新規の対象・概念に対して適当な語彙が欠如している、もしくは、慣習的言語使用に飽き足りず新しい語彙・語法を生み出す、といった日常の言語活動に顕著な新しい言語形式・使用への欲求に基づいているからである。したがって、Innovationには、Ökonomie（本稿ではEllipseに相当）が組み込まれるのをはじめ、2.2で見てきたメタファー、換喩、婉曲語法、誇張法、反語、あるいは借用などといったような多くの要因がすべて含まれることになる。ところで、このInnovationと最後のEvolutionは、言語変化が生み出される契機を表しているという点で共通しているが、前者は「目的論的な」言語変化の要因に関係するのに対して、後者は当初の目的とは異なる「予期せぬ」言語変化を含んでいるという点で異なっている。そして最後に、InnovationとEvolutionからのアウトプットがVariationにプールされ、ある特定のヴァリエントが選択されることになる。なぜならば、多くの言語変化は[A] → [B]ではなく、[A] → [A/B] → [B]のような経過をたどると考えられるからである。以上のことをまとめれば、図5のようになろう。

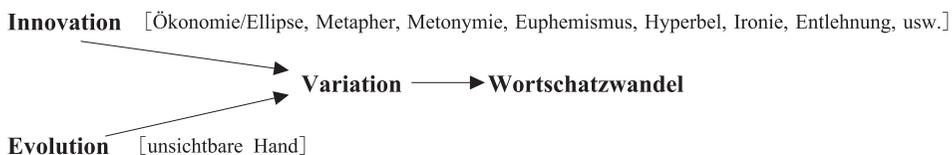


図5 語彙変化モデル

一般的に言うと、人間は伝統や習慣に従って生きる存在であると同時にそれらを壊し、新しい価値観を生み出していく存在でもあって、それは言語活動においても同様で、人間は伝統に従うこともできるし、新しい流行を生み出すことも可能である。ここでいう伝統とは、既存の語彙要素からなるシステムを指し、それはもっぱら言語的コミュニケーションの確保に寄与することを目指すいわば「自動化」された世界である。しかし、一方で人間にはそのような世界に飽き足りず、しばしばもっと迫力のある、そして強い「表現性」(Expressivität)を有する言語表現を求める願望も認められる。それはちょうど、自らを他人とは異なる服装で装いたいと願うファッション心理と似通った面があるといえるかもしれない。自分の伝達意図を最適に実現するための表現を求めるこのような欲求こそが、語彙変化の最大の契機である。だが、当初はそのような際立つ表現方法も—2.2.5 誇張法において典型的に見られるように—頻繁な使用によりインフレに陥り、新鮮味が薄れてくると、別のインパクトのある新しい形式にとって替わられるという同じプロセスをたどる。そしてそのプロセスが何度も繰り返されて起こることを意味(語彙)変化の歴史は教えてくれるのである。

参考文献

- Besch, Werner/Norbert Richard Wolf (2009): Geschichte der deutschen Sprache. Berlin.
- Betz, Werner (³1974): Lehnwörter und Lehnprägungen im Vor- und Frühdeutschen. In: Friedrich Maurer/Heinz Rupp (Hrsg.): Deutsche Wortgeschichte. Bd. 1. Berlin/New York, 135-163.
- Jakobson, Roman (1956): Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances. In: Jakobson, Roman/ Morris Halle: Fundamentals of Language. The Hague, 52-82.
- Keller, Rudi (²1994): Sprachwandel. Von der unsichtbaren Hand in der Sprache. Stuttgart.
- Nübling, Damaris/ Antje Dammel/ Janet Duke/ Renate Szczepaniak (²2010): Historische Sprachwissenschaft des Deutschen. Eine Einführung in die Prinzipien des Sprachwandels. Tübingen.
- von Polenz, Peter (²2000): Deutsche Sprachgeschichte. Bd. 1 Einführung, Grundbegriffe, 14. bis 16. Jahrhundert. Berlin/New York.
- Stedje, Astrid (1989): Deutsche Sprache gestern und heute. München.
- Szczepaniak, Renate (2009): Grammatikalisierung im Deutschen. Tübingen.
- Trier, Jost (1931): Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes. Die Geschichte eines sprachlichen Feldes. Heidelberg.
- 福本喜之助 (1980): ドイツ語史よりみた外来語の研究。朝日出版社。